「生　き　た　言　葉」

（「西尾実の国語教材論」筑波大学教育学系論集第８巻第２号　補遺）

桑　原　　隆

「『国語』が第一巻の巻頭に『生きた言葉』を置いたのは，この国語学習の最も基礎的な領域を具体的に明示しようとしたものであって，……」（「国語活動と国語愛」『特報』２号，昭10・10・20）と編集者である西尾自身が説明しているように，「生きた言葉」という教材は『国語』全10巻の特徴や性格を象徴的に表わしているものである。すでに紹介した峯岸教諭（第２東京市立中学校）の調査によれば（『筑波大学教育学系論集』第８巻第２号参照），生徒側からの人気度は，巻１の全課の中においては低いけれども，教師の側や当時の国語教育界には，相当な衝撃を与えたことは事実である。その証拠には，逐一紹介することは避けるが，『特報』に寄せられている論稿は必ずといってよいほど，この教材に触れているのである。

「生きた言葉」の原作および教材を一覧表にしたのが表①である。（3の㊁を除く作品を，本稿の終わりのところに 資料 として掲載。）

表 ①

		題　　名	誌・教科書	発行年	備　　考
1		無　題	会　誌　第８号（第二東京市立中学校）	昭和 9・3・23	場面は放課後で，素材は「さようなら」
2		生きた言葉	実践国語教育 1巻1号	9・4・1	〃
3	イ	生きた言葉	中学校国語漢文科用 国　語	9・8・5	
	ロ	生きた言葉	同 国　語	9・12・20	〃
	ハ	生きた言葉	同 国　語（改訂版）	12・12・18	〃
	ニ	生きた言葉	同 国　語（新訂版）	16・10・19	〃
4		言　葉	高等女学校国語科用 国　語（女子用）	13・12・1	挨拶の場面なし
5		おはよう　生きたことば	中　等　国　語（国定教科書）	22・3・	場面は朝の登校時で，素材は「おはよう」

（注）① 3の㊀，㊂，㊁は文部省検定済の教科書で，3の㋑は文部省検定済の印はなく，検定を受ける前の原教科書であると思われる。したがって，3の㋑の教材は，一般には使われなかった教材ではないかと推測される。なお，3の㋑の教科書は国立教育研究所に所蔵されており，『国語教育史資料』（法令出版）に収載の教材はこの版によるものである。

② 4は，同じ岩波の『国語』であるが，高等女学校国語科用に編集されたものである。教材の題名は，たんに「言葉」で，挨拶の場面はなくなっている。中学校用の『国語』との比較的考察は機会を改めたい。

③ 5は，戦後の国定教科書の教材である。戦後の検定教科書においても採択されているが，未整理。

「生きた言葉」という教材の原点は，第２東京市立中学校に勤務（大15・４～昭10・３。なお，この間専任教諭として勤めたのは，昭４・５～昭８・９で，その前後は授業嘱託として勤務）している時の体験である。西尾はこのような日常的な生活体験から鋭くとらえることにすぐれた才をもっていた。理論を実践化していくというよりも，実践から理論を構築することの重要性を指摘していることとも関係し，また，言語活動主義あるいは言語生活主義提唱の根源には，西尾自身のこういった日常性をとらえる鋭敏な感覚があったからであろう。「ツェッペリン伯号を迎えて」という書き下ろしの教材も，日常の体験から生まれたものである。

第２東京市立中学での体験は，西尾の問題意識をかなり刺激するものであった。[1]の作品には，「多分一昨年の春であったであろう」と書かれているから，昭和７年の春のことであろうか。この体験を，勤務校の校友会誌第８号に，「無題」という題で，随筆風の一篇の作品にまとめた。中学校の校友会誌という性格もあってのことか，この作品には道元の愛語論は引用されていない。ほぼ同じくして書かれたものと思われるが，[2]の『実践国語教育』誌に寄せた作品では，「生きた言葉」という題がつけられ，道元の愛語論でもって肉付けされ深められている。[1][2]ではいずれも，場面は放課後で帰途中のことである。挨拶の言葉は「さようなら」である。おそらく，この状況は体験そのものを綴ったものであろう。これらの体験そのものと体験を素材にした[1][2]の論考が契機となって『国語』の冒頭を飾る教材が生まれることになる。

『国語』に書き下ろされた教材は，[2]と同じ題名ではあるけれども，場面を放課後から朝の登校場面に修正している。挨拶の言葉も「おはよう」になっている。[1][2]の書き出しは，「ある日の放課後」であるのに対して，[3]の㋑㋺㋩㋥および[5]の教材ではすべて「四月初のある朝」である。自己の体験を基にしつつも，教材として書き下ろす際，中学校に入学して国語の第一課を学ぶ教材として，それにふさわしい状況設定，すなわち「四月初」，および一日のはじまりとしての「朝」に設定しなおしたものであろう。

[3]の㋑㋺㋩㋥は『国語』に書き下ろされた教材であるが，あえてここに整理し，㋥を除いて終わりに 資料 として掲げたのは，㋩と㋥は同一文章であるけれども，㋑㋺㋩ はそれぞれ書き改められているからである。したがって，『国語』に収録された「生きた言葉」は三種類あることになる。それだけ，西尾は教材として文章にまとめるとき，思索をめぐらし，推敲に推敲を重ねたのである。

[3]の㋑㋺㋩ いずれも形式上は八つの段落から構成されているが，その第６番目の一番長い段落を㋑㋺㋩ ともにその全体を改作しているのである。一生徒が教師に挨拶をしそこない，欠礼を謝す。その言動に教師が感動し，「言葉」というものについての考えを説く段落である。その他の段落でも若干の手直しが施されているが，第６段については，作者西尾実が推敲を重ね最も苦心した跡がうかがわれる。

[2]および[3]㋑は道元の「向かひて愛語をきくは面をよろこばしめ，心を楽しくす」という一節を引用して，生きた言葉というものの創造的な働きを説いている。[3]㋺では道元の愛語の世界には触れないで，いのちあることばとして「生きた言葉」を位置づけている。[3]㋩ になって再び，「良寛が座右の銘にしていたという『愛語』の中に」と書き添えて，やはり道元の世界に触れ

ながら，「生きた言葉」の創造的機能を説いているのである。㋑，㋺，㋩の三種のうち，㋩が愛語に言及しつつ簡潔なまとまりをみせている。2から3㋑へ，さらに3㋺と書き変えられ，そして3㋩の文章へと昇華している。そこには，大きな影響を与えたハーン（小泉八雲）の制作論，とくに推敲という苦役的作業を西尾自らが行っていることを見逃してはならいであろう。

これらの経過をみると，3㋺では道元に触れることを一たん取りやめているものの，㋩になって再びその世界に論究しており，西尾が道元の愛語にかなり魅力をおぼえていたことがわかる。㋩は昭和12年の改訂版で，この改訂版には，巻9の12課で「愛語」そのものも取り上げ，巻10の結びの「生涯稽古」ともあわせて考えると，西尾がいかに東洋的な「道」の世界に価値を見出していたかが明確に理解できよう。

2から3にかけての文献で，言語活動主義の展開との関係において，以下の諸点は摘記しておいてよいであろう。

「……この意味に於いて，私は芭蕉が，俳諧を以て俗談平語を正すものとした精神に感嘆を禁じ得ないと共に，そこに新しい ── しかし当然な国語教育の新領域を見出すことがで来るように思う」（2　傍線引用者）

昭和9年7月の「読方教育論」における新領域の主張に向かう一歩前のものとして注記しておきたい。この段階で「国語教育の新領域」が意識的な対象として取り上げられているのである。また，3の教材において，「談話や問答や挨拶のような，日常の言葉の鍛練」（㋑，㋺），「話す働きを鍛練」（㋺），「日常の言葉」（㋩）といった表現が使われていることも注目しておきたい。

「生きた言葉」の教材で，第4の段落では，「……これ程はっきりとその非を改めることが出来たなら，どんなに幸福であろうか」（㋑，㋺）が，「……，自他共にどんなに幸福になるであろうか」（㋩　傍線引用者）と書き変えられている。あえて「自他共に」ということばを入れているところに，西尾の言語観，言語教育観の深まりをみることができる。この教材の最後の段落には，「日々刻々の言葉を生きた言葉にすることによって，心を拓き，いのちを向上させてゆかなくてはならない」とのべ，言葉と人間の両面交通を重要視している。人間（心）→ことばという方向だけでなく，ことばが人間を形成するという機能を指摘しているのであり，『学習指導の研究』の参考資料には，この点について言及しているフィヒテの『独逸国民に告ぐ』が紹介されてもいる。〈人間⇄ことば〉というように一体的にとらえ，さらに，人間を「自」だけではなく「他」との共存においてとらえていく。ここには西尾の立場が明確に表われている。戦後の「通じ合い」という考えにもつながりをもっている。

「生きた言葉」という教材によって，新しい教材観，さらには国語の学習指導の新しい領域を提示した価値は改めてのべることもないであろう。新領域としては，話しことばの指導にその中心が置かれたことは事実であるけれども，言語活動主義はもっと広がりをもっているものである。読むことを対象にした教材体系にも関係している。

「生きた言葉」の教材は，この教材を読むという学習活動で展開されるもので，話しことばそのものをその場で指導していく学習指導とは次元を異にしている。話しことばそのものを直接指導し，その領域を国語教育の地盤として根底にすえていくことの提唱と，もう一方では，読むこと

を通じて行われる指導に資する新しい教材の開発という両側面があるであろう。この「生きた言葉」の教材は，前者に対しては間接的であるけれども，両者を提唱した価値をもっていよう。

読むことを通じて行われる指導にあっては，教材は読むことに値するだけの内容をもっていなければならない。露骨に教訓や道徳を並べても国語の教材にはならない。「表現に生命あり結晶あるもの」でなくてはならない。西尾が何度か書き変えているのもそのためであろう。もちろんこの教材には教訓や道徳的なものが含まれていることは事実であるけれども，それが単なる「技術」の問題としてではなく，深い人間理解から説きおよんでいることが，読むことを通しての教材として価値をもっていよう。

資　料

1　無　題

ある日の放課後 ── 多分一昨年の春であつたであらう ── 私はいつものやうに，學校からの歸途，日暮里の墓地の間を山手線の驛を目ざして歩いて行つた。

あの櫻並木を通り越して舗道にさしかゝつた時，一人の少年が私の傍を急ぎ足で通り過ぎた。後姿を見ると，まだ制服もま新しい，入學したばかりの二中生である。間もなくまた私の背後から來た一人の生徒が，私を追ひ越さうとして，「先生さよなら」と挨拶した。見ると五年生である。するとさきに私を追ひ越した一年生が急に立ち止つて，道の左側に直立して待つてゐる。近づくと，脱帽して「先生さよなら」といふ。私も，朗らかな氣分で「さよなら」と挨拶を返した。すると，私の聲が終るか終らない中に，彼は再び語を發して，

先生，私はさつき先生だといふことを知りませんでした。

というた。私は

あゝさう，さよなら

と思はず二度目の挨拶をした。そしてこの事を心にくりかへしつゝ，電車に乘つた。

先生に對し，學友に對し，はつきり言葉に出して挨拶せよとは，わが校平素の教育である。この新入生も，早速この教育を受けたのであらう。そしてその禮儀を一教師に對して缺いたと氣づいた時，氣づいた場所に何の躊躇もなく立ち止つて，その教師を待ち受け，そこで挨拶を果し，さきの缺禮を謝したものと見える。

考へて見ると羨しくさへある。われわれは，誤つたと知つた時，これほど即座に，これほど率直にその非を認め，その非を改めることが出來るであらうか。「先生」とよばれた自分自身が，この點で果していつもたしかだといひ得るであらうか。私はその頃ちやうど訓育の係であつたので，翌朝朝禮の際にこのことを話し，私の感想をも述べようかと思つたがそれは全校生徒の爲にはよい範であらう。しかし純眞そのものゝやうな本人の爲には迷惑なことに相違ない。私は何よりも

その純眞を害ひたくなかつた。さう思つてわざとこれを語ることを差控へた。

私は今でもその生徒が誰であつたかを知らない。また知らうとも思はない。たゞこの小さな出來事が，二中生活の一端であり，又二中精神の一表現であることを喜びとしたい。そしてあの新入生らしい純眞さと率直さとがいつまでも失はれないことを，知らない一生徒のために祈つてやまない。

〔昭和9年3月23日　『会誌』第8号　第二東京市立中学校校友会　14〜15ページ　これと同じ作品が，「一新入生のあいさつ」と題名をかえて，『自然・人間・古典との対話』（国土社　昭55・6・25）に収載。〕

2　生きた言葉

ある日の放課後 ── 多分一昨年の春であつたらう ── 私はいつものやうに學校からの歸途，日暮里の墓地の間を，山手線の驛を目ざして歩いて行つた。

途中あの櫻並木を通り越して舗道にさしかゝつた時，一人の生徒が私の傍を急ぎ足で通り過ぎた。後姿を見ると，まだ制服もま新しい，入學したばかりの生徒である。間もなくまた私の背後から來た一人の生徒が，私を追越さうとして，「先生さよなら」と挨拶した。教室で教へてゐる五年生の一人である。するとさきに私を追越した一年生が急に立止り，道の左側に直立して待つてゐる。私が近づくと，脱帽して，「先生　さよなら」といふ。私も朗かに「さよなら」と挨拶を返した。すると私の聲が終るか終らない中に彼は再び語を發して，

先生，さつき私は先生だといふことを知りませんでした。

というた。私は

あゝさう，さよなら

と思はず二度目の挨拶をした。私はこのことを心にくりかへしつゝ電車に乘つた。

先生に對し，學友に對し，はつきり言葉に出して挨拶せよとは，學校の平素の教育である。この新入生も，早速この教育を受けたのであらう。そして彼は一教師に對してその禮儀を缺いたと氣づいた時，直ちにその氣づいた場所に立ち止つてその教師を待ち受け，そこで挨拶を果し，さきの缺禮を謝したものと見える。

考えて見ると羨しくさへある。われわれは，われわれの所爲が誤つてゐたと知つた時，これほど即座に，これほど率直にその非を認め，その非を改めることが出来るであらうか。私は彼に「先生」とよばれた。しかし彼こそこの點に於ては私の先生ではないか。私は明るくされた氣持で，車中こんなことを考へてゐた。

その後も私は時々このことを思ひ出す。そしてあの少年の一心な面持とはりきつた聲とをありありと眼前に見聞くやうに感じると共に，その純眞さがいつまでも失はれないことを彼のために祈らざるを得ないのである。

道元禪師は「向ひて愛語をきくは面をよろこばしめ心を樂しくす」といつてゐられる。勿論私はこの少年のことばをそのまゝ禪師のいはれた愛語であると强說するものではない。しかしまた全然別なものでもないと思ふ。言はれるべき機會に，しかも心そのものがそこに躍り出たかのやうに言はれた言葉には，たしかに人の心を喜ばせ，人の世を明るくする力がある。のみならず，道元禪師が「愛語を好むよりはやうやく愛語を增長するなり。しかあれば日頃知られず見えざる愛語も現前するなり云々」といはれてゐるやうに，かういふ言葉は，それを發した人の心を開拓して，その本然の力を實現し增進させる。心が端的に言葉に現れ，言葉が直ちに心を向上させる —— この境地に至って，始めて言葉が眞に生命あるものとなるのである。

勿論國語教育に於ては，論文も隨筆も小說も讀ませなくてはならぬ。文も句も詩も讀ませなくてはならぬ。文も書かせなくてはならぬ。しかしそのためにかくの如き生きたことばの指導を疎かにしたならば，それらは單なる死兒の年數へや砂上築樓の作業に終るであろう。この意味に於て，私は芭蕉が，俳諧を以て俗談平語を正すものとした精神に感歎を禁じ得ないと共に，そこに新しい —— しかし當然な國語教育の新領域を見出すことが出來るやうに思ふ。

〔昭和9年4月1日　『実践国語教育』第1巻第1号　48～49ページ〕

3 —㋑　生きた言葉

四月初のある朝，私はいつものやうに電車から降りて，春らしい陽ざしを樂しみながら，ゆつくり學校の方へ歩いて行つた。

途中公園の櫻竝木を通り越して舗裝道路にさしかかつた頃，一人の生徒が私の傍を急ぎ足で通り過ぎた。後姿を見ると，まだ制服もま新しい，入學したばかりの生徒である。間もなくまた私の背後から來た生徒が，私を追ひ越さうとして，「お早うございます」と挨拶した。見ると五年生の一人である。すると，さきに私を追ひ越した新入生が，何を思つたか急に立止り，道の左側に直立してゐる。そして私が近づくと，脫帽して「お早うございます」といふ。私も「お早う」と挨拶を返した。すると私の聲の終るか終らない中に，彼は再び語を發して，「先生，私はさつき先生だといふことを知りませんでした」といつて頭を下げた。「あゝ，そう」といひながら，思はず私も頭を下げた。

先生に對し，學友に對し，必ずはつきり言葉に出して挨拶せよとは，學校の平素の教育である。この新入生も，早速この教育を受けたのであらう。そして一人の先生に對してその禮を缺いたと氣づいた時，直ちにその氣づいた場所に立止つて待ち受け，挨拶を果し，さきの缺禮を謝したものとみえる。

考へてみると羨ましい行動である。誰でも，自分のしたことが誤つてゐたと知つた時，これ程こだはりなくその非を認め，これ程はつきりとその非を改めることが出來たなら，どんなに幸福であらうか。私は明るくされた心持で學校の門を入つた。

その後も私は時々このことを思ひ出す。そしてあの少年の一途な顔と，はりきつた聲とをありありと見聞くやうに感じる。

道元禪師は「向かひて愛語をきくは面をよろこばしめ，心を樂しくす」といつてゐられる。勿論私は，この少年の言葉をそのまゝ禪師の所謂愛語であると强說するものではない。しかし，それが，眞心そのものから迸り出たものである點に於て，全然これと別なものではないと思ふ。言ふべき機會に，しかもこれほど本氣に言はれた言葉には，たしかに人の心を喜ばせ，人の世を明るくする力がある。のみならず，禪師がまた「愛語を好むより，やうやく愛語を增長するなり。しかあれば，日頃知られず見えざる愛語も現前するなり」といはれてゐるやうに，かういふ言葉は，たゞこれを聞く人の心を喜ばせるだけでなく，又それを發した人の心をも開拓して，彌々その本然の力を實現させ，發展させる。かくいのちが端的に言葉に現れ，言葉が直ちにいのちを發展させる境地に至つて，始めて言葉が生きたものとなるのである。そして，さきの一生徒の場合に於ては，それは恐らく少年らしい純眞さの現れに過ぎなかつたであらうが，我々は又，努力し鍛錬することによつて，かういふ境地を自覺的に開拓してゆくことが出來るのである。

國語の學習に於ては，論文も隨筆も小說も讀まなくてはならぬ。歌も句も詩も讀まなくてはならぬ。文も綴らなくてはならぬ。しかしそれだけで，談話や問答や挨拶のやうな，日常の言葉の鍛錬を疎にしたならば，その學習は，根のない植物を育てようとすると等しく，決して眞の國語力の成長を結果することは出來ないであらう。

我々は何よりもまづ我々自身の言葉を生きた言葉たらしめることによつて，我々の心を拓きいのちを向上させなくてはならぬ。そしてそれが，文を綴り，文を讀む眞の基礎であることを自覺しなくてはならぬ。

〔昭和９年８月５日発行，文部省検定済の印なし。『中学校国語漢文科用　国語』巻１の第１課１～６ページ。『国語教育史資料　第２巻　教科書史』（東京法令出版　昭56・４・１）に収録の教材。〕

3 ―㋺

生　き　た　言　葉

四月初のある朝，私はいつものやうに電車から降りて，春らしい陽ざしを樂しみながら，ゆつくり學校の方へ歩いて行つた。

途中公園の櫻竝木を通り越して舗裝道路にさしかかつた頃，一人の生徒が私の傍を急ぎ足で通り過ぎた。後姿を見ると，まだ制服もま新しい，入學したばかりの生徒である。間もなくまた私の背後から來た生徒が，私を追ひ越さうとして，「お早うございます」と挨拶した。見ると五年生の一人である。すると，さきに私を追ひ越した新入生が，何を思つたか急に立止り，道の左側に直立してゐる。そして私が近づくと，脫帽して「お早うございます」といふ。私も「お早う」と挨拶を返した。すると私の聲の終るか終らない中に，彼は再び語を發して，「先生，私はさつき先生だといふことを知りませんでした」といつて頭を下げた。「あゝ，さう」といひながら，思は

ず私も頭を下げた。

先生に對し，學友に對し，必ずはつきり言葉に出して挨拶せよとは，學校の平素の教育である。この新入生も，早速この教育を受けたのであらう。そして一人の先生に對してその禮を缺いたと氣づいた時，直ちにその氣づいた場所に立止つて待ち受け，挨拶を果し，さきの缺禮を謝したものとみえる。

考えてみると羨ましい行動である。誰でも，自分のしたことが誤つてゐたと知つた時，これ程こだはりなくその非を認め，これ程はつきりとその非を改めることが出來たなら，どんなに幸福であらうか。私は明るくされた心持で學校の門を入つた。

その後も私は時々このことを思ひ出す。そしてあの少年の一途な顏と，はりきつた聲とをありありと見聞くやうに感じると共に，「先生だといふことを知りませんでした」といふ，力ある言葉を思ひ返さずにはゐられない。

實際，かういふいのちの底から押し出して來たやうな言葉には，不思議に人の心を明るくする力がある。時に氷のやうに固く鎖した人の心をも一瞬に融かし和げるのは，かういふ言葉である。しかもそれは聞く人の心を動かすだけではなく，もつと直接に，それを發した人の心を開拓し，その最も深い，最も眞實な人間性を鼓舞し，開發するものである。かくいのちがそのまま言葉に現れ，言葉が直ちにいのちそのものであるやうな域に至つて，始めて言葉が眞に生きた言葉になるといへよう。さきの新入生の場合に於ては，それは恐らく少年らしい純眞さの現れであつたであらう。しかし我々は話す働きを鍛錬することによつて，かういふ生きた言葉を益々養ひ育ててゆくことが出來るのである。

國語の學習に於ては，論文も隨筆も小說も讀まなくてはならぬ。歌も句も詩も讀まなくてはならぬ。文も綴らなくてはならぬ。しかしそれだけで，談話や問答や挨拶のやうな，日常の言葉の鍛錬を疎にしたならば，その學習は，根のない植物を育てようとすると等しく，決して眞の國語力の成長を結果することは出來ないであらう。

我々は何よりもまづ我々自身の言葉を生きた言葉たらしめることによつて，我々の心を拓きいのちを向上させなくてはならぬ。そしてそれが，文を綴り，文を讀むことに對しても，眞の基礎であることを自覺しなくてはならぬ。

〔昭和９年12月20日発行，昭和９年12月26日文部省検定済。『中学校国語漢文科用　国語』巻１の第１課　１～６ページ。〕

3 —㋩

生　き　た　言　葉

四月初のある朝，私はいつものやうに電車から降りて，春らしい陽ざしを樂しみながら，ゆつくり學校の方へ歩いて行つた。

途中，公園の櫻竝木を通り越して舗裝道路にさしかかつた頃，一人の生徒が，私の傍らを急ぎ足で通り過ぎた。後姿を見ると，まだ制服もま新しい，入學したばかりの生徒である。間もなくまた

私の背後から來た生徒が，私を追ひ越さうとして，「お早うございます」と挨拶した。見ると五年生の一人である。すると，さきに私を追ひ越した新入生が，何を思つたか急に立止り，道の左側に直立してゐる。私が近づくと，脱帽して「お早うございます」といふ。私も「お早う」と挨拶を返した。すると，私の聲の終るか終らない中に，彼は再び語を發して，「先生，私は，さつき先生だといふことを知りませんでした」といつて頭を下げた。「あゝ，さう」といひながら思はず私も頭を下げた。

先生に對し，學友に對し，必ずはつきり言葉に出して挨拶せよとは，學校の平素の教育である。この新入生も，早速この教育を受けたのであらう。そして，一人の先生に對してその禮を缺いたと氣づいた時，直ちにその氣づいた場所に立止つて待ち受け，挨拶を果し，さきの欠禮を謝したものとみえる。

考へてみると，誠に羨ましい行動である。誰でも，自分のしたことが誤つてゐたと氣づいた時，これ程こだはりなくその非を認め，これ程はつきりとその非を改めることが出來たなら，自他共にどんなに幸福になるであらうか。私は明るくされた心持で學校の門を入つた。

その後も，私は時々このことを思ひ出す。そしてあの少年の一途な顏とはりきつた聲とを，ありありと見聞くやうに感じるとともに，「先生だといふことを知りませんでした」といふ，本氣な言葉を思ひ返さずにはゐられない。

實際，かういふ眞實な言葉は，不思議に人の心を明るくするものである。あの良寛が座右の銘にしてゐたといふ「愛語」の中に，

> むかひて愛語をきくは，おもてをよろこばしめ，こころをたのしくす。むかはずして愛語をきくは，肝に銘じ，魂に銘ず。

といつて愛語の力を讃へ，更に進んで，愛語することによつて愛心を拓くことが出來るといふ意味のことをいつてあるのも思ひ合はされる。かく，聞く人の心を明るくし，言ふ人の心を拓くやうな言葉こそ，眞に生きた言葉であるといつてよいであらう。そして，この生きた言葉を實現しゆくことによつて，やがては，同じ「愛語」の中の，「愛語よく廻天の力あることを學すべきなり」といふ言葉の意味をも，本當に會得することが出來るやうになるであらう。

國語の學習に於ては，いろいろな文を讀み，又いろいろな文を綴る。しかし，それに止つて，我々自身の日常の言葉を疎かにしたならば，その學習は，畢竟，根のない根物を育てようとするやうなもので，眞の國語の力を成長させることにはならないであらう。

我々は，我々の心を育てることによつて，我々の言葉を力あるものにしなくてはならないのはいふまでもないが，また日々刻々の言葉を生きた言葉にすることによつて，心を拓き，いのちを向上させてゆかなくてはならない。そして，それが眞に文を讀み，文を綴るための缺くべからざる基礎であることをも覺らなくてはならぬ。

〔昭和12年12月18日発行，昭和12年12月21日文部省検定済『中学校国語漢文科用　国語』（改訂版）巻１の第１課　１～６ページ〕

4

言　　葉

人間の原始時代には，自分の心を他に傳へるのに，物を指示したり，身振や表情をしたりして相手にわからせたもので，今日のやうな，音聲としての言葉を發達させたのは後のことである。勿論，ひどく驚いた時や急に何かに感じた時などに，思はず叫び聲を發するといふやうなことは原始時代にもあつたであらう。けれども，それを「驚いた」とか，「嬉しい」とか，「悲しい」とかいふやうな，意味のある音聲卽ち言葉で言ひ表すに至つたのは，ずつと後のことである。

今日一般に言葉といへば，誰でも單純に，意味のある音聲としての言葉を思ひ浮かべる。けれども，日常實際に用ゐられてゐる言葉は，そんなに簡單なものではない。例へば，私どもが日に幾度となく口にしてゐる「はい」といふ言葉にしても，それは極めて簡單明瞭な國語の一つであるけれども，これが用ゐられてゐる有樣を精しく注意してみるとなかなか複雜なもので，一見同じやうな「はい」でも，その遲速・高低・抑揚等によつて，そこに現れる心持は同じではない。更に，それを唯，上の空でいふか，心の底からいふか，ほんの，口先でいふか，ゐずまひをも正していふかによつて，それぞれ著しい違ひを生じてくる。かういう事實は，この一語に限るものではなく，多くは指示や身振や表情や動作と切り離すことの出來ない關係で結びつき，時には又，唯肯くだけで同意を表し，直ちに行動をとつて了解したことを示すといふやうに，獨立した身振や動作を交へて一つの纏った談話を成立たせることも珍しくはない。

かうして，日常行はれてゐる談話は，單なる音聲としての言葉だけではなく，それを中心としてさまざまな要素が結びついたり，交つたりしてゐる複雜なものであつて，それに應じて，同一の言葉も，異なつたさまざまな意味を成立たせ，そのそれぞれは，知らず知らずの間にその時その場合に於けるその人の「人間」を表してゐるものである。のみならず，井戸水は汲めば汲むほど新しい良い水が出て來るやうに，言葉も常にその人のまことが現れるやうな言ひ方をすれば，おのづからその人の「人間」が伸び，その人のまことが充ちて來るものである。

言葉はかういふやうに，話す人の「人間」を表すと共に，それによつて，「人間」を育てるものでさへあるから，随つてこれを聽く人に及す影響も深く大きい。ふと耳にしたたつた一つの言葉が，その人の一日を或は明かるくし，或は暗くするといふやうなことは，我々の往々經驗するところである。かう考へて來ると，あの良寛が座右の銘にしていたといふ「愛語」の中に，

> むかひて愛語を聽くは，おもてをよろこばしめ，こころをたのしくす。むかはずして愛語を聽くは，肝に銘じ，魂に銘ず。

とあることも深く背かれる。

國語の學習は，主として文を讀み，文を作ることである。けれども，その文は言葉を文字に書き表したものに外ならないから，平生，言葉をよく話し，よく聽くことが何よりも有力なその根底でなくてはならない。日常語したり聽いたりしてゐる言葉を疎かにして置いて，唯文を讀み，文を作ることだけに努めるのは，ちやうど根のない植物を育てようとするやうなもので，眞に生きた國語の力を成長させることにはならないであらう。

〔昭和13年12月1日発行　『高等女学校国語科用　国語　女子用』巻1の第1課　1～6ページ〕

5

おはよう　生きたことば

四月はじめのある朝，私はいつものように電車からおりて，春らしい日ざしを樂しみながら，ゆっくり学校の方へ歩いて行った。

途中，公園のさくら並木を通り越して舗装道路にさしかゝったころ，ひとりの生徒が私のそばを急ぎ足で通り過ぎた。うしろ姿を見ると，まだ制服もま新しい，入学したばかりの生徒である。まもなくまた私のうしろから來た生徒が，私を追い越そうとして，「おはようございます。」とあいさつした。見ると，五年生のひとりである。すると，さきに追い越した新入生が，何を思ったか急に立ちどまり，道の左側に直立している。そして，私が近づくと脱帽して，「おはようございます。」と言う。私も「おはよう。」とあいさつを返した。すると，私の声の終るか終らないうちに，かれは再び語を発して，「先生，私はさっき先生だということを知りませんでした。」と言って頭をさげた。「あゝ，そう。」と言いながら思わず私も頭をさげた。

「先生に対し，学友に対し，必ずはっきりことばに出してあいさつせよ。」とは学校の平素の教育である。この新入生も，さっそくこの教育を受けたのであろう。そして，ひとりの先生に対してその礼を欠いたと氣づいた時，直ちにその氣づいた場所に立ちどまって待ち受け，あいさつを果たし，さきの欠礼を謝したものとみえる。

考えてみると，うらやましい行動である。だれでも，自分のしたことが誤っていたと知った時，これほどこだわりなくその非を認め，これほどはっきりとその非を改めることができたなら，どんなに幸福であろうか。私は明かるくされた心持で，学校の門をはいった。

その後も，私は時々このことを思い出す。そして，あの少年のいちずな顔と，はりきった声とを，ありありと見聞くように感じるとともに，「先生だということを知りませんでした。」という，力あることばを思い返さずにはいられない。

実際，こういういのちの底から押し出して來たようなことばには，不思議に人の心を明かるくする力がある。時に，氷のようにかたくとざした人の心をも，一瞬に溶かしやわらげるのは，こういうことばである。しかもそれは，聞く人の心を動かすだけではなく，もっと直接に，それを発した人の心を開拓し，その最も深い，最も眞実な人間性を鼓舞し，開発するものである。このように，いのちがそのまゝことばに現われ，ことばが直ちにいのちそのものであるような域にいたって，はじめてことばが直ちに生きたことばになると言えよう。さきの新入生の場合においては，それはおそらく少年らしい純眞さの現われであったであろう。しかし，われわれは話す働きを練ることによって，こういう生きたことばをますます養い育てて行くことができるのである。

國語の学習においては，論文も随筆も小説も読まなくてはならぬ。歌も句も詩も読まなくては

ならぬ。文もつゞらなくてはならぬ。しかも，それだけで，談話や問答やあいさつのような，日常のことばをおろそかにしたならば，その学習は，根のない植物を育てようとするに等しく，眞の國語力の成長を見ることはできないであろう。

われわれは，何よりもまず，われわれ自身のことばを生きたことばたらしめることによって，われわれの心をひらき，いのちを向上させなくてはならぬ。そしてそれが，文を読むことに対しても，眞の基礎であることを自覚しなくてはならぬ。

〔昭和22年３月発行　『中等国語』文部省　14～16ページ〕